

# 谷崎作品における病理学的な要素

## — 「少年」「刺青」を中心に —

吉美顕\*

---

### 目次

---

1. はじめに
  2. 谷崎とクラフト＝エービング
  3. 谷崎作品に見られる病理学的要素
    - 3-1. 「刺青」—清吉の病理学的な心理の変化
    - 3-2. 「少年」—マゾヒズムへの傾倒
  4. おわりに
- 
- 

## 1. はじめに

谷崎文学についてよく言われる要素は、官能的な快楽である。谷崎は、その世界を人間のエロスの相として捉えた。その官能的な快楽に伴う病的要素がマゾヒズムとサディズムであり、このような倒錯性が「悪」と連結されて、谷崎文学の特徴とも言える悪魔的な女性が誕生する。さらに、そのエロティシズムの世界を含む女性美に拝跪する男性を登場させようとする谷崎の意図もいろいろな作品から窺える。ところが、彼の作品にみられる病理学的要素は、クラフト＝エービング<sup>1)</sup> (Krafft-Ebing)の影響から来ていると言える。

---

\* 又松大学校日文学科 招聘教授 日本近・現代文学

1)クラフト・エービング (1840—1902) はマンハイムに生まれ、シュトラスブルク大学、グラーツ大学、ウィーン大学などの精神医学教授を歴任し、1879年に『精神医学教科書』を著して医学界に大きな影響を与えた。しかし、彼の名が今日知られるのは、異常性欲者の詳細な記述と分類を試みて 1886年に『性的精神病質』を公開したことによる。この本はその後改訂を重ね、分類、命名もかなり変化した。サディズム、マゾヒズム、同性愛、屍姦、快楽殺人、性欲亢進症、性欲欠乏症など、重要な類型のほとんどを記述命名している。彼は精神鑑定医として各国の裁判所から性犯罪者の鑑定を依頼された多くの臨床経験から、この仕事をなして、性科学の創設

本稿では、クラフト＝エービングの言うサディズムとマゾヒズムが谷崎の作品にはどのように反映しているかについて把握してみる。また、「刺青」（第2次「新思潮」第3号、1910・11）の男主人公の清吉の病理学的な心理の変化と「少年」（「スバル」1911・6）に現れている男主人公の信一のサディズムからマゾヒズムへの転向に注目したい。清吉の内面に潜んでいる宿願は、彼の表象である娘の背中に「刺青」を彫り込んで、男性を征服する強者つまり、新しい女性を誕生させることであった。このように「刺青」において新しい女性の誕生は、清吉の病理学的な心理の変化と「刺青」によるものである。「少年」では、対等で相互的な関係である友人の中でごっこという遊戯による強者が誕生する。

したがって、本稿では、まず谷崎作品に見られるクラフト＝エービングの影響について検討し、その後、清吉の心理の変化の要因である「刺青」と少年たちの快樂の追求をめぐる谷崎文学の美の世界を述べてみる。なお、引用文においては、旧かな・旧カナはそのままとし、旧漢字は特別な場合を除き、新漢字に改変することを断っておく。

## 2. 谷崎とクラフト＝エービング

吉田城は著書『神経症者のいる文学—バルザックからプルーストまで—』の中で、クラフト＝エービングは変質論の影響を受けた人であり、司法精神医学として各地で異常性欲者の鑑定をした経験を生かして、『性的精神病質—臨床的・法医学的研究』（1886）にまとめたと言及している。さらに、変態の世界が描かれたこの書物はサディズム、マゾヒズムなどを初めて扱ったものとされている<sup>2)</sup>。クラフト＝エービングの倒錯的な性欲がよく現れている作品を谷崎は大学の文科の一年の時、読んだことを「饒太郎」の中で明らかにしている。

忘れもしない大学の文科の一年に居た折の事、彼はふとした機会からクラフトエービングの著書を繙いたのである。その時の饒太郎の驚愕と喜悅と罪昂とはどのくらいであつたらうか？彼は自分と同じ人間の手になる書籍と云ふ物から、これ程恐ろしい、これ程力強いショックを受けたのは実にその時が始めであつた。彼はペエジを繰りながら読んで行くうちに激しい身慄ひが体中に瀰漫するのを禁じ得なかつた<sup>3)</sup>。

者の一人と目されているが、犯罪心理学、司法精神医学の創設者の一人としても高く評価されている。

2) 吉田城『神経症者のいる文学—バルザックからプルーストまで—』（名古屋大学出版会、1996・7）33頁。

3) 「饒太郎」『谷崎潤一郎第2巻』（中央公論社、1981・6）405頁。

饒太郎はクラフト＝エービングと出会って、力強いショックを受けたのは初めてであったとその印象について述べている。饒太郎がクラフト＝エービングの言説から得たのは、「驚愕と喜悅と罪昂」である。これは饒太郎の病理学的な要素への自己認識であろう。また、饒太郎はそのクラフト＝エービングに触れて、自分と同じく快楽と歓楽を胸のなかに潜めている人がいることに気づいたのであろう。クラフト＝エービングの言うマゾヒズムは次の通りである。

精神的性欲生活中の特別の倒錯症であって、これにかかっているものは、その性欲的感情と思考において、異性の意志には絶対的無条件に屈服し、その支配を受け、圧迫され暴行をうけたいという欲望によってみたされる4)。

マゾヒズムの要素を持っている人は上のような種類を空想し、またそれを実行しようと切実に念願するのである。このような言説に一致する人物は饒太郎である。「饒太郎」の中で作者は、「ますますMasochismの原則に従って圧倒される事を喜ぶやうに傾き始めたのである」5)とはっきり饒太郎自身に語らせる。饒太郎は極度な歓楽を求め、マゾヒスティックに毒婦的な女性を愛し、さらに麻薬まで服用している。饒太郎は快楽のために女性に無条件的に降伏し、女性の毒婦的な行動を受け入れ、歓楽を味わう。饒太郎にとって、人生の最大の目的は、「出来るだけ冷酷な残忍な取り扱いを受けて、寧ろ激烈な肉体的の痛苦を与へて貰ふ事」である。したがって彼は猛烈なマゾヒストであったことを察することができる。

末村昌家は谷崎のこの作品が発表される前年には、黒沢義臣訳『変態性欲心理』（大日本文明協会、1913・9）も刊行され、F.J.Rebmanによる*Only Authorized English Adaptation* と題する英訳があると指摘している6)。谷崎はその書籍を英訳で読んだのか和訳で読んだのかははっきりしていないが、『変態性欲心理』のドイツ語原著の表題はラテン語*Psychopathia Sexualis*(1886)であり、谷崎が接する可能性のあった英訳本はやはり同じラテン語名を表題とし、クラフト＝エービング自身の訳で1906年にニューヨークのRebman社により出版された。

谷崎の作品「刺青」は1910年に、「饒太郎」は1927年に発表されている。両作品からはクラフト＝エービングの影が見えており、「饒太郎」を自伝的な小説であると考えれば、谷崎はクラフト＝エービングの本などを入手して読んだと想定できる。

谷崎とクラフト＝エービングとの関係について、末村昌家は、「饒太郎」と「捨てられる迄」を取り上げ、マゾヒズムの演劇的特質を中心に述べている。ところが、谷崎とクラフト

4) クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（図書出版美術館、1981・5）140頁。

5) 「饒太郎」『谷崎潤一郎第2巻』（中央公論社、1981・6）449頁。

6) 松村昌家『谷崎潤一郎と世紀末』（思文閣出版、2002・4）15頁

＝エービングとの関係を論じる場合、看過できないのは、サディズムの世界である。それは、クラフト＝エービングがマゾヒズムだけではなく、病理学的な要素を表すために、サディズムの固有のメカニズムに目をつけているからである。谷崎文学に登場する男主人公たちは、基本的な性向はサディズムであるが、様々な媒介によってマゾヒストへ変化していくのが特徴である。

谷崎は「饒太郎」の中で饒太郎にクラフト＝エービングの病理学的な要素を適用させて、マゾヒズムの世界を位置づけているが、「刺青」や「少年」の中では、サディズムからマゾヒズムへの変化や、また、その病理学的な要素が共存している。このように、マゾヒズムとサディズムは共存の関係でありながらも、対極の関係である。

クラフト＝エービングの芸術の認識が見える作品は「刺青」、「饒太郎」、「少年」だけではなく、いろいろな作品から窺える。これらの作品に表れている主人公たちには、歓楽の注文に応じる露骨な気風が存在しており、彼らが有しているそのような要素はクラフト＝エービングの著書『変態性欲心理』を基本にしている。

### 3. 谷崎作品に見られる病理学的な要素

#### 3—1. 「刺青」— 清吉の病理学的な心理の変化

クラフト＝エービングは性倒錯の病理学現象について、次のように述べている。

残虐を行い、これのみて性的快感や淫好の感覚をさそい起こし、あるいは、さらにそうした感覚を味わうために、生命あるものに屈服や苦痛を強いたり、痛みや傷を負わせるものである<sup>7)</sup>。

クラフト＝エービングの言うサディズムの世界を「刺青」においては、刺青師である清吉が実践しており、清吉から病理学的な心理が取り上げられる。

吉村博任は、「刺青」におけるサディズムからマゾヒズムへの変化を認めながらも、これまで谷崎文学は「マゾヒズムの文学として扱われ、サディズムの視点」<sup>8)</sup>からはあまり論じられていなかったと指摘している。橋本稔は吉村博任と同じく「谷崎文学といえば、ひとは

7) クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（図書出版美術館、1981・5）101頁。

“Sadism is the experience of sexual pleasurable sensations (including orgasm) produced by acts of cruelty, bodily punishment afflicted one one's own person or when witnessed in others, be they animals or human beings.”

Krafft-Ebing, *Psychopathia Sexualis* (N.Y.-London:Rebman Company, 1906)p. 80.

8) 吉村博任「谷崎文学・キーワード」『国文学解釈と鑑賞谷崎潤一郎耽美の構図』（至文堂、1976・10）152頁。

もっぱらマゾヒズムを問題にしてサディズムは見たがらない」<sup>9)</sup>と言う。このような傾向は、谷崎作品に多い女性崇拜という意味だけを取って、マゾヒズム的に思われるからである。

清吉は、人々に刺青を彫り込むことによって、快楽を感じる。このような設定からは、谷崎のサディズム的な美学が窺える。「人知らぬ快楽と宿願」という清吉の嗜虐的異常は、刺青を彫り込んだ後は被虐に一転する。清吉は最初から加虐的なイメージを演じている人物として設定されている。清吉の刺青はその「奇警な構図と妖艶な線とで」知られている。また、「人々の肌を針で突き刺す時」にもたらされる苦しい呻き声が激しければ激しいほど清吉は「不思議に云い難き愉快」さを感じる。このように清吉の内面に存在している病理学的な要素によって、清吉の美の宿願は達成される。

清吉の目的は、「美しきものの力」を作ることであり、これが彼の宿願である。清吉はその目的を達成するために、「光輝ある美女の肌を得て」、その上にく刺青>を彫り込むのである。清吉は心に描き憧れる女と出会う。その女性は「男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける足」の所有者である。さらに、その娘の顔は「不思議にも長い月日を色里に暮して、幾十人の男の魂を弄んだ年増のやうに物凄く整つて」いた。このような身体の描写からは妖婦的なイメージが窺える。清吉は彼女の中に潜んでいる「真の「己」」を呼び起こすために、清吉は娘に「古の暴君紂王の寵妃、末喜を描いた絵」と「肥料」という絵を見せる。

瑠璃珊瑚を鏤めた金冠の重さに得堪えぬなよやかな体を、ぐつたり勾欄に靠れて、羅綾の裳裾を階の中段にひるがえし、右手に大杯を傾けながら、今しも庭前に刑せられんとする犠牲の男を眺めて居る妃の風情と云い、鉄の鎖で四肢を銅柱へ縛りつけられ、最後の運命を待ち構えつつ、妃の前に頭をうなだれ、眼を閉じた男の顔色と云い、物凄い迄に巧に描かれて居た。

画面の中央に、若い女が桜の幹へ身を倚せて、足下に累々と斃れて居る多くの男たちの屍骸を見つめて居る。女の身辺を舞いつ、凱歌をうたう小鳥の群、女の瞳に溢れたる抑へ難き誇りと飲びの色。それは戦の跡の景色か、花園の春の景色か。

これは娘が男性を滅亡させる悪魔的な存在と化することへの予兆になっている。娘は「しばらくその絵を見つめていたが、「知らず識らず其の瞳は輝き其の唇」は震えた。娘の顔は「だんだんと妃の顔に似通つて来た。娘は其所に隠れたる真の「己」」を見出した。やがて娘も絵の妃のように、「男の生血に肥え太り、男のむくろを踏みつける」という悪魔性を発揮するのである。清吉は娘の内部に存在している悪魔的な要素を自覚させるべく娘の背中に<刺青>を彫り込んだのである。

9) 橋本稔『谷崎潤一郎 そのマゾヒズム』（八木書店、1974・4）8頁。

清吉はこのような残虐性の対象を必要とし、その対象を占有し、身体的作用によって感動をうける。その感動こそ清吉にとっては最高の快樂であった。このグロテスクなサディズム的行為は女よりも男性によく見える。清吉は入れ墨を施す時、その女を自分だけのものとし、征服する能動的な態度を取るが、〈刺青〉が彫込まれた女性を見てからはあくまでも受動的になる。

清吉は娘の背中に彫り込んだ〈刺青〉について、自己の「命のしたたり」であり、自己の芸術の「魂の色」と考えていた。清吉が彫り込んだ〈刺青〉は清吉の病理学的な要素であり、サディズムの象徴である。それは、防御的で受動的な娘が、〈刺青〉が刻まれた後、清吉を征服する女、つまりサディスティックな女性に変わったからである。「お前さんの命を貰った代りに、私は嘸美しくなつたらうねえ」という一文はそれを裏付ける。「命を貰う」ということはサディズムであり、「美しくなつたらうねえ」というのは、加虐的な「女」になったことを意味している。

「残忍な芸術家」清吉のサディズムは、〈刺青〉によって悪魔的な女を生み出し、自分の願望つまり、悪魔的な女性に踏まれたいという希望を達成させるのである。それは清吉が娘に「男と云ふ男は、皆なお前の肥料になるのだ」と言っている話からうかがえる。さらに女の清吉に対する「お前さんは真先に私の肥料になつたんだね」と言う発言は、女が清吉を征服したこと、サディストの清吉が完全にマゾヒストになったことを示す一文である。ここで「肥料」というのは、「美＝悪への拝跪というマゾヒズムを武器」<sup>10)</sup>としている谷崎のマゾヒズムへの嗜好がよく分かる言葉である。このようにマゾヒズムを志向した谷崎は「清吉の命のしたたり」である刺青、女体、病理学的な要素を通して、「美＝悪」であるサディスティックな女性とそれを拝跪する男性像の描写を試みている。

清吉にとって快樂の世界は、「女性の足に踏まれるのがマゾヒズムの快感である」<sup>11)</sup>とするクラフト＝エービングの指摘と一致している。「自分の体を踏みにじってくれることを切望」する男性は、女性の足で踏まれることによってさらなる快樂を感じるのである。清吉は、娘の肉体に耽溺し、その美しい足に踏まれることへの願望を見てとれる加虐的な要素を捨てて、被虐的な立場へ傾いていく。「美学は肉体の言説として誕生した」<sup>12)</sup>とテリー・イー

10) 三田英彬「エロティシズムの喚起力」『国文学解釈と鑑賞』（至文堂、1976・10）59頁。

11) 「時としては、鶏やその他の生きている動物を、淫樂の空想の対象として立派な長靴で踏みつけてみようという欲求もあった。彼はこれを「ビーナスの足の下に犠牲」となったものといっていた。また、ある時は女性が長靴をはいて自分の体を踏みにじってくれることを切望した。」クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（ヒューマンライフ社、1981・5）138頁。

“Sometimes he was impelled to take chickens and other animals with him to Phryne, in order to have her tread on them with her pretty shoes for his pleasure. He called this “sacrificing to the feet of Venus.” At other times he had the woman walk on him with her shoes on, the harder the better.” Krafft-Ebing, *Ibid.*, pp179-180

12) テリー・イーグルトン『美のイデオロギー』鈴木聡・藤巻明・新井潤美・後藤和彦訳、（紀伊国屋、

グルトンが言ったように、清吉のマゾヒスティックな心性や肉体美の耽溺から生まれた美は男性を踏みつけることができる女性の誕生である。

### 3—2. 「少年」—マゾヒズムへの傾倒

谷崎の作品の主人公たちは、多くサディズムとマゾヒズムの要素を基本にする性倒錯現象をも起こす。このような性心理学的症状は、「刺青」以外にも「麒麟」（「新思潮」4号、1910・12）<sup>13)</sup>、「少年」、「幫間」<sup>14)</sup>（「スバル」1911・9）においてよく現れている。これらの作品で展開されているのは、異常感覚と美意識との結合であり、さらに、官能的な興奮と結びついて、美が出現するということである。

針で突き刺される男の苦痛の呻きに不思議な快感を味わう刺青師、酷刑に処せられる罪人の姿に悦ぶ美女、小便をお酒だと強いられて飲む少年、女に馬鹿にされたいという欲望にとりつかれた幫間、これらの登場人物は、それぞれ「糜爛の極致に達したデカダンスの芸術の好適例」<sup>15)</sup>である。

「少年」の主人公である塙信一は学校ではいつも「弱虫だの泣き虫だの」と言われ、遊び相手もいないのであるが、家の中では強者になり、仙吉や「私」や姉の光子の前では君臨している。その姿を見た「私」はびっくりする。「泣く」というのは弱さの表現であるが、弱さと見えた信一は実は強さをもっていたのである。他者との関係は傷つけたり傷つけられたりするという対等な関係であるが、信一、「私」、仙吉という少年たちは学校と家での相互的関係は反対の様相を取っている。信一は学校では傷つけられる（見られる）という受動性の立場であるが、家では、傷つけるというサディスティックな強者である。

1996・4) 25頁。

13) 「階の下、芳草の青々と萌ゆる地の上に、暖な春の日に照らされて或は天を仰ぎ、或は地につくばい、躍りかかるような闘うような、さまざま形をした姿のものが、数知れず転び合い、重なり合って蠢いて居た。そうして或は時は太く、或は時は細く、哀れな物凄い叫びと轉が聞こえた。ある者は咲き誇れる牡丹の如く朱に染み、ある者は傷ける鳩の如く戦いて居た。其れは半は此の国の厳しい法律を犯した為め、半は此の夫人の眼の刺激となるが為めに、酷刑に施さるる罪人の群であった。一人として衣を纏える者もなく、完き膚の者もなかった。其の中には夫人の悪徳を口にしたばかりに、炮烙に顔を毀たれ、頸に長枷を箠めて、耳を貫かれた男達もあった。靈公の心を惹いたばかりに夫人の嫉妬を買って、鼻を削がれ、両足をたたれ、鉄の鎖に繋がれた美女もあった。其の光景を恍惚と眺め入る南子の顔は、詩人の如く美しく、哲人の如く厳粛であつた。」「麒麟」『谷崎潤一郎全集第1巻』（中央公論社、1981・5）88頁。

14) 「「実はあの催眠術も、お前さんに惚れた弱みの狂言ですよ」と打ち明けるつもりでしたが、『そら！もうかかっちゃまった。そうら。』と忽ち梅吉の凛とした、涼しい目元で睨められると、又女に馬鹿にされたいと云ふ欲望の方が先へ立って、此の大事の瀬戸際に又々ぐたりとうなだれてしまいました。『梅ちゃんの為めならば、命でも投げ出します。』とか、『梅ちゃんが死ねと云へば、今でも死にます。』とか、尋ねられる俚に、彼はいろいろと口走ります。」「幫間」『谷崎潤一郎全集第1巻』（中央公論社、1981・5）206頁。

15) 永井荷風「谷崎潤一郎」『三田文学』第2巻11号、（1911・11）153頁。

信一の狼に旅人の「私」や仙吉が食われる遊びで、「私」は信一の傍若無人な、サディスティックな行動にすっかり惹かれてしまうのである。そこでは、日常生活の秩序や制度は解体され、狂気や遊びの原理が支配している倒錯の快樂の世界がうかがえる。仙吉と「私」は信一が不在の時、西洋館に忍び込む。「私」は壁にかけられた「西洋の乙女の半身像」を見上げる。その絵は光子をモデルにした「裸体のままの肩と腕とに金や珠玉の環を飾つた下げ髪の女」という消画像である。やがて、光子が消画像の通りの姿をして現れ、仙吉と「私」の前で魔性を見せる。「私」や仙吉は女王になっている光子の家来になるが、翌日信一も光子に服従するようになる。今まで信一が強者であったが、光子が女王になり、女王と奴隸という関係が成立する。

光子は面白くて堪らぬようにゲラゲラ笑いながら、自分の中で喰いちぎった餡ころ餅だの、滅茶苦茶に足で踏み潰した蕎麦饅頭だの、鼻汁で練り固めた豆炒りだのを、さも穢ならしそくに皿の土へ堆く盛って私達の前へ列べ、『これは小便のお酒のつもりよ。一さあお前さん、一つ召し上がれ』と、白酒の中へ痰や唾吐を吐き込んで二人にすすめる<sup>16)</sup>。

上のように、性の眼覚めとともにしだいに美少女に威圧され、やがては「湯上がりの爪」を切らせられたり、「鼻の穴の掃除」を命じられたり、「Urineを飲」まされたりするような願使に甘んずる「少年」の主人公は、顕著な汚物嗜好を示している。多くの病理学的要素は、美的な感性と結びついているが、コプロラグニーは、「不潔なものを狂崇愛好する一種のマゾ」<sup>17)</sup>なのである。コプロラグニーは、「健常者」には嫌悪感が生じるが、ここではそれによって、より活発な快感、強い刺激、淫好が感じられる。このような現象は、クラフト＝エービングの著書「性心理学上の症例」、「Psychopathia Sexualisで分類しているいくつかのマゾヒズムの類型」<sup>18)</sup>に合致している。ここでは、谷崎の子供の感性による快樂の世界を描写しようとする意志とクラフト＝エービングの言っているマゾヒズムの演劇的な快樂の要素が見える。少年たちの遊戯つまり、ごっこは演劇的な行為による倒錯の要素をもっており、また、それは谷崎文学の快樂の象徴である病理学的要素である。

少年たちの日常的に分離されている空間での遊びの結果は主人と家来、女王と奴隸という関係になる。信一はスケープ・ゴートであった光子の官能的な姿へ変貌することによって、マゾヒストに変わり、光子を崇拝する。

官能的な女性の登場で支配・被支配関係は最終的には逆転される。神々のごとく他者に君臨せずにおられない光子は、「醜い者は弱者であり、美しい者は強者」であるという谷崎の美意識、そのものである。

16) 「少年」『谷崎潤一郎全集第1巻』（中央公論社、1981・5）165頁。

17) クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（図書出版美術館、1981・5）140頁。

18) 永井荷風「谷崎潤一郎」『三田文学』第2巻11号（1911・11）153頁。

谷崎は、倒錯の快樂を見いだすために、子供の遊戯による深層構造のマゾヒズムとサディズムを主題にして描いており、このような病理学的な要素は、これから展開されていく谷崎文学の原型となる。

## 4. おわりに

谷崎作品におけるクラフト＝エービングの影を調べてみたが、谷崎がクラフト＝エービングに触れて得られたのは、サディズムやマゾヒズム、病理学的な世界の認識である。若き谷崎は、クラフト＝エービングが病理として告発した*Psychopathia Sexualis*(1886)という書物を読んで、その世界に感化され、自分の作品にそのプロットを反映していることを見逃してはならない。それは谷崎の作品にはクラフト＝エービングの言う病理学的な要素がよく窺えるからである。特に「刺青」「少年」の男主人公の内面に表れているマゾヒズム、サディスティックな要素は、クラフト＝エービングの言う病理学的なものとも一致している。

清吉の病理学的顕現の足がかりは、女性の官能的な肉体美と鮮烈な色彩感で歌い上げている〈刺青〉である。「捨てられる迄」（「中央公論、大正3・1、原題は「捨てられるまで」）の主人公は「彼の女の肉体と靈魂とを舞台にして、其処に自分の幻覚を表現させようと努めて居る」と思っている。そのように、清吉も自分の中に内在している病理学的な要素や、女体美を土台にして、自己の生命と魂である凡て（女郎蜘蛛）を娘の背中に彫り込んで、本当に美しい女性、つまり男性を征服する女性を作り上げ、その女性を仕立てる。美しい女の肉体を渴望するサディスティックな清吉は、自己の歡樂、つまり肉体美に耽溺するために、献身的なマゾヒストになる。

谷崎は「少年」の中で信一を登場させて、子供という視点から快樂の世界を求めた。谷崎にとって子供は感性よりは快樂そのものである。子供は遊ぶ存在、ホモ・ルーデンスである。その遊びによる官能的な快樂は信一のサディズム的な要素を崩壊し、マゾヒズムの世界に導いていく要素になる。

清吉や信一は最初は加虐的なイメージを演じている人物として設定されているが、清吉は〈刺青〉を彫り込んでから、信一は官能的な女性の登場によって、マゾヒスティックな人になる。そのマゾヒスティックな心性が、悪魔的な女性に見出した美である。それは、マゾヒスティックな視線がとらえた悪魔的な女性に顕現する美であり、肉体的、官能的なものである。谷崎は「自分はMasochistenの芸術家として立つより外、此の世に生きる術のない」<sup>19)</sup>と考えているほど、マゾヒズムの官能的な快樂の世界を重要視している。

19) 「饒太郎」『谷崎潤一郎第2巻』（中央公論社、1981・6）406頁。

悪（サディズム）はいつも勝利を占めるところの女性的なるものの名前であるように、「悪」に目覚めてサディスティックな女へ変貌した女は、男性を征服して「凱歌をうたう」のである。「刺青」の冒頭部分にある「美しい者は強者である」という文章の中で「強者」というのはサディスティックな女を指しているものだと考えられる。

谷崎は自分の性癖は生まれつきであると「父となりて」の中で述べているが、クラフト＝エービングの取上げている症例を借用、または援用して、自作品に反映しているのである。が、病理学的な要素によって強者と弱者の関係の逆転の構図や美しく男性を支配する強者の誕生は谷崎文学における特徴である。

## 【参考文献】

### テキスト

『谷崎潤一郎全集第1巻』（中央公論、1981・6）

『谷崎潤一郎全集第2巻』（中央公論、1981・6）

### 雑誌

「国文学解釈と鑑賞」（至文堂、1976・10）

「国文学解釈と鑑賞 谷崎潤一郎耽美の構図」（至文堂、1976・10）

「三田文学」第2巻11号、（1911・11）

### 単行本

クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（ヒューマンライフ社、1981・5）

クラフト＝エービング『異常性愛の心理』（図書出版美術館、1981・5）

『谷崎潤一郎全集第2巻』（中央公論、1981・6）

『谷崎潤一郎全集第4巻』（中央公論社、1981・8）

テリー・イーグルトン『美のイデオロギー』鈴木聡・藤巻明・新井潤美・後藤和彦訳  
（伊豆国屋、1996・4）

橋本稔『谷崎潤一郎 そのマゾヒズム』（八木書店、1974・4）

松村昌家『谷崎潤一郎と世紀末』（思文閣出版、2002・4）

吉田城『神経症者のいる文学—バルザックからブルーストまで—』（名古屋大学出版会、1996・7）

Krafft-Ebing, *Psychopathia Sexualis* (N.Y.-London:Rebman Company, 1906)

## 要 旨

本稿では、「刺青」「少年」における清吉や信一の病理学的心理の変化による美意識と悪魔的な女性の誕生について述べてみた。清吉の病理学的な要素は、クラフト＝エービングからの影響によるものである。谷崎が大学の一年生の時、クラフト＝エービングの著書 *Psychopathia Sexualis* (N.Y.-London:Rebman Company, 1906)を読んで感化され、それを作品のモチーフにした。

清吉は、人々に刺青を彫り込むことによって、快楽を感じるサディストである。芸術家から刺青師へ墮落した清吉の宿願は、光輝のある白い肌や、妖婦的な女性の背中に自分の命であり、魂である〈刺青〉を彫り込んで、新しい女性を作り上げることである。清吉の〈刺青〉によって娘は、男性を征服する悪魔的な女性に変わる。清吉が拝跪をささげた美は、一般的な美の観念とはいささか異なる。それは、清吉の病理学的な心理の変化が女性に見出した美であるからである。いいかえれば、サディストである清吉のマゾヒスティックな性向が発現する美である。

「刺青」以外「少年」という作品からもサディズムやマゾヒズムや病理学的な要素がうかがえる。ここでは、信一のサディズムが官能的な女性の登場によって、マゾヒズムに変化し、女性の前で跪くというクラフト＝エービングの言うマゾヒズムの世界と一致している。谷崎はクラフト＝エービングの学説を自分の作品に反映しているのは確であるが、その病理学的な心理の変化による悪魔的な女性の誕生は彼の独特な創造の世界であり、個性に満ちている世界である。

キーワード：サディズム、マゾヒズム、病理、悪魔的、女体美、妖婦的

투 고 : 2008. 5. 31  
1차 심사 : 2008. 6. 14  
2차 심사 : 2008. 6. 28

住 所 : 대전시 서구 괴정동 KT빌리지 아파트102-302호  
電 話 : 042—630—9806 (研究室) 、016—456—8440  
e-mail : goldmountian@hanmail.net